

ポジティブ行動支援に関する校内研修会

長い2学期もとうとう終わり、待ちに待った冬休みが近づいてきました。先日のポジティブ行動支援の研修会はいかがでしたでしょうか。私にとっては、スクールワイド PBS の第1層支援の基礎部分を理解することができ、大変貴重な時間となりました。宮木先生の聞き手を引きつける巧みな話術により、1時間強の講義があっという間に終わってしまいました。

特に、「問題行動を減らす努力よりも、望ましい行動が増えるような環境をつくる」というお話は、とても大切だと感じました。現在の教育現場においては、問題行動への対処の仕方にも限界があり、日々の問題行動への対応に教員は疲弊しているのではないかと考えます。私自身も、問題行動への対応ばかりに追われると気が滅入ってしまいます。問題行動ばかりに目を向けるのではなく、教育者として望ましい言動を教え、促し、できたときにはしっかりと価値づけ、習慣化させることを中心に行っていくほうが、教員の心もポジティブになり、忙しい中にも余裕が生まれるのではないかと思います。

まずは第1層支援として、生徒会を中心にポジティブ行動マトリクスを作成し、望ましい行動が少しでも増えていくように、「促し、教え、価値づける」スキルを磨いていきましょう。

2月9日には、再度宮木先生にお越しいただき、研修会を開くことが決まりました。共有フォルダの研修用資料として、PBS に関するさまざまな資料を入れておりますので、ご一読いただけると幸いです。

実行機能について①

研修通信の前号において、10月の県確認問題の分析から、小学校段階の内容理解が不十分ではないかと書きました。また、QU研修の際にも、ある先生が「テスト以前に課題ある」とおっしゃっていました。やはり、周防大島中学校の生徒には、学習面においても、モチベーションの面においても、レディネスに課題があるのは間違いないと思います。このようなことを考えているときに、ある書籍が思い出されました。森口佑介氏の『子どもの発達格差』です。この本の表紙の内容紹介には、以下のように書かれています。

今、子どもたちの間に「ある格差」が生まれている。目標に向けて自分を制御する力「実行機能」や、他者を思いやる力「向社会的行動」の格差だ。これは子どもたちが、「目の前のことを優先し、今を生きる」傾向にあるか、「将来に備え、未来に向かう」傾向にあるか、幼児期から二極化する現実を示している。さらに、これらの能力が低い子どもは、将来的に健康や経済面で不利になる可能性が高く、逆に高い子どもは、有利になる可能性が高いと言う。本書では、子どもの将来に影響を与えるこれらの能力の発達に見られる格差を「発達格差」と名付け、その実態および改善策を紹介する。

もちろん、学力向上の策としてさまざまな取組をしていくことは大切ですし、実際に3学期からさまざまな手を打っていきますが、それ以外にも考えなければならないことがあります。発達格差が広がっているとすれば、生徒の発達や成長に関わる教員として、どのように「実行機能」を伸ばし、「向社会的行動」を増やしていけるのか。そうしたことも問われているような気がします。これらは、キャリア教育にもポジティブ行動支援にもつながってきます。次号では、やるべきことを行う力である「実行機能」について書いていきます。

参考文献 森口佑介『子どもの発達格差 将来を左右する要因は何か』PHP新書 2021年